

## 第5学年国語科における「意味と内容」のひろがり

5年C組 沖 香寿美

### —題材『地球環境について考えよう』の学習をとおして—

#### 1. 子どもに対するねがいと学習指導のねらい

##### (1) はじめに

本単元では、調べることの楽しさを味わわせるために、「一秒が一年をこわす」「ホテルのすむ水辺」を中心に学習した。調べることが楽しいと感じるためには、いくつかの条件が必要になると考えている。それは、「問題を見つけ出せること」「知的な満足感がえられること」の2つである。そこに、「調べたことを伝える」という楽しさが加われば、問題に向かって意欲的に取り組み、今まで知らなかった世界について調べる楽しさを味わうことになるものと考えた。

##### (2) 問題を見つける

問題を見つけ出すためには、「一秒が一年をこわす」「ホテルのすむ水辺」を確かに読むことから始めた。「一秒が一年をこわす」は、地球環境問題について、幅広く書いている。例えば、4段落には、「不毛のさばくになってしまった地いきさえある」とか、5段落には、「野生の生物たちはすみかをうばわれ、次々とほろびようとしている」と述べている。子どもたちは、くわしく読み進めていったとき、「砂漠になってしまった地域とはどこだろう」「滅びようとしている動物は?」「すでに滅んでしまった動物もいるかもしれない」などの思いをもった。

また、「ホテルのすむ水辺」では、「一秒が一年をこわす」に書いている「自然とうまく付き合ってきた」ことについてくわしく考えたり、危機に対してどんな取り組みがなされているかの例を読んだりして、2教材の情報を組み合わせることによって、問題を見つけ出した子どももいた。

##### (3) 知的な満足感を得る

子どもたちが、教材を確かに読んでいく中で生まれた疑問や、くわしく知りたいと思ったことを問題とし、調べることを通して知的な満足感を味わわせたいと考えた。

調べることが、「今まで思っていたことが、より確かになった」「今まで気づかなかったことが、新しくわかった」「疑問に思っていたことが、解決できた」「今まで思っていたことが、違っていた」などのような思いをもてるものであってほしい。今まで思っていたことが、変更されたり、書き換えられたり、付け加えられたりすることが知的な満足感を味わうことになると考えたからである。

##### (4) 調べたことを伝える

子どもが、知的な満足感を得ることができたら、誰かに伝えたい、教えたいという気持ちをもつだろう。その気持ちを大事にするためにも、新聞やレポートにまとめ、それを、友達や家族、あるいは、全校の子どもたちに伝える喜びを味わわせたい。伝えることは、満足感、達成感を味わうだけでなく、自信につながるものと考えからである。

以上のことから、単元目標を次のように設定した。

##### (5) 単元目標

- ・「一秒が一年をこわす」と「ホテルのすむ水辺」の読みを通して、問題をもって楽しく調べ、知

的な満足感を得る。

- ・ 「一秒が一年をこわす」と「ホテルのすむ水辺」を正確に読み取る。
- ・ 文章を読んで筆者の考えをとらえ、自分の考えを確かにしていく。
- ・ 調べたことや自分の考えが伝わるように、地球環境レポートにまとめる。

## 2. 5年生の子どもがとらえた「意味と内容」

温暖化現象、水、大気汚染、動植物の絶滅など、環境問題は、現代社会にとって危急の課題である。子供たちも、地域の抱える環境問題についての情報は多少なりとも身に受けているであろう。地球規模の環境問題についても、テレビや本などによって耳や目にしているはずである。

本単元では、漠然としていた環境問題や地球環境について認識する。調べるための問題をもつ、問題について調べ、調べたことを伝える、という学習過程を考えた。ここで大事にしたいのは、問題をもつために、「一秒が一年をこわす」「ホテルのすむ水辺」を確かに読むことであった。問題をもつためには、教材を曖昧にとらえてはいけぬ。内容を確かにとらえてこそ、本当に調べてみたい問題が見つかるのである。このように内容を確かにとらえ、問題が見つかったとき、学習が深まったと考える。本単元の学習の深まりとは、追求から追究に変容したときであり、それが「意味」と「内容」のひろがりと考えられる。

本単元では、「意味」と「内容」のひろがりをもつことを以下の三つに絞った。

- 1 教材を読み、筆者の考えをとらえたり、自分の考えを確かにもつことができたか。
- 2 教材を読み、知的な満足感を得るための問題をもつことができたか。
- 3 問題を解決するために調べ、自分なりの考えをまとめることができたか。

まず一つ目は、子どもたちは、環境についての知識をテレビや新聞、雑誌などから情報を得ている。その内容とは、フロンガスが増えたためにオゾン層が破壊された、とか、二酸化炭素が増えているらしい、など地球には関係があるが、自分とはかけ離れたところで環境破壊が起こっていると考えられる子どもが多い。教材を読むときには、書かれていることの実事、筆者のものの見方、考え方を確かにながら読み進めた。

二つ目は、子どもたちは、「一秒が一年をこわす」を読んだとき、漠然としていた環境問題の原因がわかったり、今、問題になっていることの重大さに気づいたりした。また、この教材は、環境問題を大げなことにしているため、漏れてしまった事実がたくさんある。例えば、「地球が重い病気にかかり」とあるが、どんな病気なのかくわしく書いていない。この他にも「野生の生物たちはすみかをうばわれ、次々とほろびようとしている」と述べているところがある。でも、滅びようとしている動物のことは書かれていないのである。教材をくわしく読んだとき、「地球はどんな病気にかかったのだろう」「滅びようとしている動物は?」「すでに滅んでしまった動物もいるかもしれない」などの思いをもった。そのほかにも、「ホテルのすむ水辺」を読んで、身近な環境問題に気づき、自然とうまく付き合っていることや環境が改善されていることに目を向ける子どももいた。二教材を読むことは、環境問題を取り上げた筆者の願いをとらえるとともに、自分の考えを確かにしていくことができた。これが、二つ目の意味と内容のひろがりである。

三つ目は、まだ完全に学習を終えていないが、内容を確か読み、「なぜだろう」「もっとくわしく知りたい」「他にも同じようなことがあるのではないだろうか」などの思いを問題をとらえ、知的な満足感を得るための問題をもつことができた。三つ目の「意味」と「内容」のひろがりとは、問題について

調べたり、自分の考えをレポートにまとめたりするときに表れると考えている。

### 3. 「意味と内容」がひろがる場面

“まなざし”を共有するために、子どもの感想やポートフォリオを大事にした。できる限り、子どもの感想や考えを共有するために、毎時間印刷をし、全員に配布した。

N・K

ぼくは、T・Kさんの日記を読んだとき、地球がこわしているというところがけっこうなつとくしました。そのとき、ぼくは、地球がこわれていると思った。ぼくは、「一秒が一年をこわす」を読んで、地球環境について、あまり興味がなかったけど、地球が病気になっていることがよくわかりました。でもどのように悪くなっているのかむずかしいところがあるので、くわしく調べていきたいと思います。

教科書教材は2教材であるが、子どもたちが興味をもって読んでいるのは「一秒が一年をこわす」である。

- ・ 「一秒が一年をこわす」を読んで地球環境がどのように悪くなっているのかを考えていきたい。
- ・ 他の本から、「一秒が一年をこわす」と同じように地球環境が悪くなっているのかを確かめてみたい。
- ・ 地球環境が良くなってきたという本もきっとあると思うので、それを見つけないか、ということが、子どもたちから出された感想である。

この感想をもとに、「一秒が一年をこわす」「ホテルのすむ水辺」を読み進めていった。

第二次 1時 「一秒が一年をこわす」を読み、環境が破壊されている事実と、その原因をつかむ。

生活が便利になると環境が悪くなるというのが、本当だろうか。という課題で学習が始まった。これは、担任から出した課題である。どの子どもも、生活が便利になると環境が悪くなる。ということを感じて書いていたり、話したりしたからである。

まず、環境の悪化ということから考えていったが、子どもにとらえは曖昧であった。どの子どもも先行の知識が豊富であり、教科書を読まなくても話し合いに参加できる。これでは、確かな読みとはほど遠くなってしまう。しかし、子どもたちは、そんなことはおかまいなしで話し合いを続けた。

そこで、確かに読むために、「筆者は、地球の環境に大きな影響およぼしているという例を出して説明しています。いくつかの例がありますか。」という発問をした。この発問は、子どもたちを文章に向かわせ、確かな読みにつなぐことができた。

Iの「例が3つなのか4つなのかわからないけど、段落ごとに例を出している」という発言がきっかけとなった。続けて、Kの「私は、3つなのか4つなのかわからない。それは、4段落と5段落に森林破壊に関係したことが書いてあるので、同じことを言っているようにも思うし、ちがうことを言っているようにも思うから」ということを受けてYが、「二つの段落は、森林がこわれていることを書いているが、4段落は、森林が切り開いた結果、大雨のとき、山崩れや洪水などの災害を起こし、土地が荒れ果て、こうして砂漠になってしまう、ということを行っているし、5段落は、ちょっとちがって、森林を開発した結果、野生の生物のすみかがうばわれ、滅びようとしているということについて書いてるので、この二つの段落は、ちがうことを教えてくれるための例だと思う」と話し合いは続いた。さらに続けて、Sが、「ぼくもYさんに賛成で、4と5段落は、ちがうことを説明していると思うけど、「また

…」と続けているので、つながりのあるところもあると思う。それは、5段落の段落自然がそれだけ貧しくなりというのは、野生生物の種類が減ることだけが貧しくなるのではなく、4段落に書いている緑がなくなり砂漠化することも貧しくなることだと思う。でも、この二つの段落は、一番言いたいことはちがうので、筆者が出した例は4つでいいと思う」と話し合いは進んだ。最後に、「森林破壊による砂漠化」「野生生物の減少」「大気や水の汚れ」「地球温暖化」の4つの例をおさえ、地球環境が悪くなっていることや、その原因を確かにとらえることができた。文や言葉を大事にすることは、互いの考えを共有し合い、確かに読むことの楽しさを味わう時間となった。

T・M

筆者は、環境が悪くなった例を4つ出して説明していました。一つ一つはよくわかりました。でも、Yさんと同じで、不毛のさばくにかわってしまった地域はどこにあるのか、そこは、どんな感じになってしまったのか、それと、そこには人が住んでいるのかと思ったので、調べてみたいです。

S・N

今日の学習で、もっと知りたいと思ったことがあります。「すみかをうばわれ、次々とほろびようとしている」で、例えば、どんな動物がほろびそうなのかと感じました。これを知るには、「レッドデータブック」が必要です。これは、絶滅しそうな動物がのっている本です。これは、人間が自分勝手に地球をめちゃくちゃにしたために絶滅した動物だと思います。それをとめるために、どうしたらいいのかと思ったので調べていきたいと思います。他にも、「人類に悪いえいきょうをあたえた」で例えばどんな悪いえいきょうか、「大きなわざわい」とはどんなわざわいか、「地球の自然となかよくしながら生きてきた」とは、例えばどんなことなのかを知りたいと思います。

#### 4. 成果と課題

学びを共有するために、ポートフォリオや感想文を印刷し、全員に配布したのは、よい方法であったと考えている。それは、発言の少ない子どもの考えも共有することができたこと、互いの考えを認め合えたので、一人一人の自信につながったこと、そして、友達の考えを知ることで、自分の読みを確かに行ってきたからである。子供の中には、説明文はきらいという傾向がある。言葉が難しいとか、ややこしいからという。本単元では、そんな子どもたちに、文や言葉に返り、じっくり読むことや、友達と自分の考えを比べる楽しさを味わってもらえたのではないだろうか。

もう一つ、「意味と内容がひろがる」ために、有効にはたらいた発問がある。これは、国語科での研究テーマである「比較」を意識してのことでもある。例えば、「例はいくつありますか」とか「筆者が強く訴えているところは何箇所ありますか」「これと似ているところは、または、ちがうところはどこですか」などである。このように、書かれていることがいくつあるのか、また同じやちがうところはどこなのかを見つけることが、文章に返り、それが確かな読みにつながり、それぞれが知的な満足感を得るための問題をもてたことは、とてもうれしいことである。

最近の私の実践において、説明的文章をじっくり読むという学習を子どもたちにさせてこなかったことが反省点であり、今後の課題となろう。

また、自分の考えを自信をもって表現し、よさを認め、互いに高まるために本音で語り合える、温かい学級集団をつくっていききたいと考えている。